

一般社団法人 日本学校教育相談学会

The Japanese Association of School Counseling and Guidance

会報 JASC

- 1◎巻頭言
- 2◎第34回総会・研究大会（栃木大会）案内
- 3◎研修委員会//認定委員会
- 4◎学会誌作成委員会//広報委員会//ガイダンスカウンセラー
関連情報
- 5◎支部のキラリ
- 6◎【宮城県支部】一支部活動報告一
- 7◎災害被災者支援委員会報告//夏季ワークショップのご案内
- 8◎会長コーナー//事務局より//編集後記

第68号

巻頭言 私と教育相談

～「教育相談の大切さ」を 伝えていきたい～

副会長に就任しました梅川康治です。就任前は事務局長を担当していました。皆様には様々な形で協力いただきありがとうございました。これからは、春日井会長・役員・事務局スタッフとともに皆様に貢献できるよう取り組んでいきます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、教育に関わる関係者の方々に、「教育相談の大切さ」と「本学会の良さ」を広く伝えていきたいと強く思っています。

私が教員になったころは全国的に校内暴力が盛んな時代でした。「生徒に対して自分のしていることはこれでいいのだろうか」と生徒指導で悩んでいたとき、ご縁があって本学会に入りました。たくさんの先生方が理論を学び実践をしていることを知り、心強く励みとなりました。不登校への対応で悩んでいたとき、教育相談について深く学べたことは私の財産となっています。また、本学会は話をよく聴いて受け止めてくれる方が多いと感じています。安心して自分を出せる素敵な居場所となりました。温かなねぎらいと励ましを受け、退職を思いとどまったこ



副会長 梅川 康治

ともあります。学校現場から離れて、教員から教育センターの相談員になったとき、不登校やいじめだけでなく虐待や発達などへの対応に悩む子どもや保護者や先生方への対応も学会で学んだことが役立ちました。現在は、教職大学院に勤務しています。現職の先生方を主な対象として、これまでの経験や学びを活かして「教育相談の大切さ」を講義でお伝えしています。学会での学びと出会いとつながりが今に役立っていることにとても感謝しています。

不登校、いじめ、校内暴力、発達障がい、自死、ヤングケアラー、LGBTなど、教育の課題は多様化しています。地球温暖化、コロナ禍、戦争など、社会環境も不安な要素が山積みです。そのような中で、未来に生きる子どもたちにどのような支援ができるのか。その答えとなるヒントを探り発見できる学会で、元気の出る学会であり続けてほしいと願っています。

**★第34回総会・研究大会
(栃木大会) 案内
(2022年(令和4年)8月6日～7日)**

前号第67号の原稿を執筆していた1月は、新型コロナ第6波が猛威を振るっていました。ところが、それもつかの間、まさかのロシアのウクライナ軍事侵攻が勃発。世界を揺るがす事態は今も進行中です。

自然災害、疫病の大流行、そして戦争という惨事ストレスに身も心もさらされ、連日のメディアストレスが襲いかかる中、子供たちは有効な手立てを持つこともなく無防備のまま放置されているのではと心配です。

報道によると「マスクを外したら、裸にされる気分になるからいつもマスクはつけておく。黙食給食は安心だからこのままがいい。テレビのニュースは怖いから見ない」という小学生が少なからず存在します。

あれだけ嫌がっていたマスク、黙食に愚痴をこぼしていた子供たちに、本来の「学びと育ち」とは違ったゆがみがいよいよ現実味を帯びてきたのかと感じます。

部活動、学校行事が軒並み取りやめになり街を群れ歩くこともない中学生はモヤモヤしながらも、「スマホ、お笑い、ゲーム」があれば何もいらないとつぶやいています。

知らず知らずのうちに「本来の闊達な学びと、育ち」の「喪失」が進行しつつあるこの難局に私たちはどう児童・生徒に寄り添っていくのか、新種の課題の出現です。

11年前、東日本大震災が引き起こした原子力発電所の放射能漏れは、東日本を中心に私たちを得体のしれない不安に陥れました。

私が住む福島県との県境、栃木県北部は原発事故の直後、高度の放射能汚染の中にありました。あの時の見えない不安と恐怖は今更ながらに記憶されています。

しかし「不安だけを煽るだけでは子供たちの心に傷だけが残ってしまう」「正しく放射能を恐れることが必要だ」と放射線の種類、日常の被ばく量、医療現場などでの放射能の役割などを客観的に説いて回った化学の先生の登場には新鮮な希望と安ど感が広がりました。

また、最近では訪問先の中学校で、「コロナについて分からないことを各教科の先生に聞いてみよう」と全校アンケートを取り、率直な疑問に対して先生方が授業を通して丁寧に答え、正しくコロナを恐れることの重要性を考えさせる取り組みもありました。

ウクライナへの核までちらつかせたロシアの軍事侵攻にも理にかなった確かな批判が待たれています。「わけもなく、怖い、怖い」と煽るだけでは安心して生活ができません。

取り巻く環境の急変が直接「命」への不安につながっていく中、子供たちのメンタルケアは単に教育相談、スクールカウンセリングにお任せのレベルでないことは明らかです。学校資源を活かし、総力で取り組まねばならない新しいフェーズに入ったと感じます。

さて、本学会夏の「第23回ワークショップ」、「第34回総会・研究大会(栃木大会)」は8月6日(土)～7日(日)、の開催に向けて準備を急いでいるところです。

先日(3/12)記念講演を引き受けていただいた宇都宮市内光琳寺の住職を訪ねてきました。井上広法(こうぼう)住職は「ここ数年若者がすぐ死にたいという言葉が発するのがとても気になっています。『死にたい』は『生きたい』の裏返しという言葉。8月31日に自ら命を落とす若者が多い現実をいたたまれない気持ちになっています。大人はこの若者の本当の深い気持ちを理解しなければいけません」と熱く語るのです。記念講演の演題は、住職から「息抜く力は、生き抜く力」というフレーズをお出しになったので、それをそのまま演題にしましょうと決めました。

住職のお住まいにはオンラインで生配信できる放送機材一式がそろっている和室スタジオがあります。栃木大会記念講演はこのスタジオからの生中継になります。当日はオンラインならではの工夫を凝らした講演をしたいとおっしゃっています。

多くの皆様の視聴をお待ちしています。

(文責：栃木大会実行委員長 柴 一彌)



★研修委員会

第34回総会・研究大会（栃木大会）に先立ち、8月6日（土）にZoomによるオンラインで第23回夏季ワークショップを開催いたします。内容の概略を本会報に掲載しております。詳細は学会ホームページまたは会報添付の3次案内をご覧ください。

さて、研修委員会では現在第33回中央研修会の準備を進めています。新型コロナウイルスの感染状況が見通せないこと、従来対面式で使用していた国立オリンピック記念青少年総合センターが改修工事で使用できないことから、第33回もZoomによるオンラインでの開催を考えております。

2022年1月9日の第32回中央研修会は、コース別研修として6コースを設け実施いたしました。第32回は教員免許状更新講習を4講座スライドして実施した関係で、夏のワークショップと同様の形式になりました。これを踏襲しては、中央研修会としての意味をなさないのではないかとこの考えのもと、研修委員会では、中央研修会の在り方について検討、協議しているところです。その中で、かつて対面式で行っていた交流会を行う予定をしています。会員だけではなく、会員外で広く教育相談にかかわっている方たちと交流し、学校教育相談についての見識を深めあうと同時に、本学会の会員増につながるきっかけになればと考えています。

第33回の概略は、次のとおりです。

〔期日〕2023年1月8日（日）

〔内容〕午前：全体会（講演）

午後：コース別研修

終了後に交流会

（文責：研修委員長 向江 幸洋）



★認定委員会

○令和3年度の資格取得等の状況について

- 学校カウンセラー新規取得者 17名
- 学校カウンセラーを基礎資格としたガイダンスカウンセラー新規取得者 10名
- 学校カウンセラースーパーバイザー新規取得者 3名
- 学校カウンセラー資格更新認定者 84名

○学校カウンセラー資格更新認定について

コロナ禍により令和2年度に学校カウンセラー資格更新認定を中止し、全ての学校カウンセラーの資格認定年度を1年間繰り延べる措置をとりましたので、今年度の更新対象は、次の登録番号の方々になります。登録証明書（カード）を御確認の上、申請をお願いします。

第2回認定（213～276）

第7回認定（644～688）

第12回認定（896～950）

第17回認定（1137～1181）

第22回認定（1369～1412）

*有効期限2022年3月31日の皆さんです。

○今年度の諸認定申請の締切等について

- 学校カウンセラー申請
要項配布済み。締切：9月15日
- 学校カウンセラー更新申請
上記該当者への案内配布7月上旬予定。
締切：12月1日
- 学校カウンセラーを基礎資格とするガイダンスカウンセラー申請
案内配布7月下旬予定
申請受付期間：9月1日～22日
- 学校カウンセラースーパーバイザー申請
要項配布済み 締切：9月30日

どうぞ皆様、期日までに申請書類の御提出をよろしく申し上げます。御不明な点は認定委員会へお問い合わせください。

（文責：認定委員長 築瀬 のり子）



★学会誌作成委員会

本会報と共にお届けしている学会誌第32号をご覧ください。今回は寄稿論文と論文2本、及び東日本大震災被災地支援委員会報告を掲載しています。

さて、会報第67号でお知らせしましたが、学会誌第33号以降に掲載される論文のうち、事例を扱っていないもの、そして執筆者の了解が得られたものについては、公表することにしております。公表の方法は、学会ホームページからの閲覧及びCiNii等において検索可能とする予定です。公表の可否については、学会誌掲載決定後に、執筆者に個別に確認いたします。この論文公表に伴い「審査に関するガイドライン」を修正しました。また、「投稿規定」の「6. 同一人（個人若しくは複数）の掲載は、連続して2回までとする。」を削除しました。学会誌第32号に掲載している「投稿規定・審査に関するガイドライン」をご確認ください。

さらに、「論文作成の手引き」には、新たに「研究論文（心理学論文）作成のために」を掲載しました。

次に、新企画として「論文作成連続講座」を開催します。1月、2月、3月に1回ずつ連続で受講していただき、お持ちの原稿を学会誌に投稿できるようブラッシュアップしていきます。少人数のオンラインゼミ形式で行います。詳しいご案内は、冬の中央研修会のご案内と同時にさせていただきます。夏のワークショップでは、本会報に同封のチラシのとおり、これまで同様の「論文の書き方」コースを実施しますので、ぜひご参加ください。

（文責：学会誌作成委員長 藤井 和郎）

★広報委員会

（書籍紹介）『学校ってなんだ！

—日本の教育はなぜ息苦しいのか—』

『麹町中学校の型破り校長、非常識な教え』等の著者である工藤勇一氏、作家・演出家である鴻上尚史との対談形式で2021年に講談社現代新書から発行された書籍である。『学校の「当たり前」をやめた。』の著者と日本の同調圧力を追求してきた演出家が対談形式で学校論をぶつけ合っている。以下、興味深かったキーフレーズを紹介したい。

- 教師への信頼を失わせるブラック校則
- 「服装・頭髪の乱れはこころの乱れ」という迷信
- 「分かる授業」が良い授業なのか



- 自律性を奪う宿題
 - 道徳の授業で内心を評価できるのか
 - 日本独特の「みんな同じ」
 - 「教師のバトン」の本質的な問題
 - 従順な子どもか自分で考える子どもか
 - 「人は信頼する人からしか価値観を学ばない」等々、挙げればきりが無い。中でも改めて日本の教育を問い直す二つの言葉が印象的である。一つは、「明治維新から変わらない一斉教授型の授業を続けていてよいのか、こんな受け身の授業を続けていては自律型の人間は育たない。」もう一つは、「文科省がいくら『主体的・対話的で深い学び』を提唱しても、子どもたちが先生の求める姿を演じるだけでは意味がない。評価されることを予測した上での対話なんてなんの力にもならない。」今日、教育現場で働く私たちには衝撃的な言葉が続く。全てを鵜呑みにしてはできないが、一読の価値がある1冊である。
- （文責：広報委員長 山本 健治）

★ガイダンスカウンセラー関連情報

本協議会が主催する研修が続々と受付開始になっています。



- 1 新企画「グループスーパービジョン・ワークショップ」
- 2 スーパービジョン研修〔スーパーバイザー申請用〕HP
- 3 受付中の研修会情報
 - (1) 第12回公開シンポジウム2022〔ハイブリッド型〕
 - (2) ガイダンスカウンセラー 実践力強化研修〔オンライン〕
 - (3) ガイダンスカウンセラー 実践力強化研修〔オンデマンド動画〕
 - (4) 2022 公認心理師試験学習会〔オンデマンド動画〕



- 1 「グループスーパービジョン・ワークショップ」は今年度から初めて実施する研修です。ガイダンスカウンセラーの力量アップはスーパービジョンする力、学校でコンサルテーションする力等、体験を通して学ぶことをねらいとして企画しました。5/29（日）、11/27（日）、2023年3/21（祝・火）の3回実施いたします。実践力アップのため

にご参加をお待ちしています。

現在、情報公開・受け付けを下記にて開始しています。

http://jsca.guide/training/jsca22052_9_gcsv.html

*2022年度資格更新対象者の方（認定番号が12で始まる方）の更新手続きを受け付中です。

※受講申し込み・問い合わせなどは、下記宛てにお願いします。

一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会事務局

〒112-0012 東京都文京区大塚 1-4-15

e-mail : info@jsca.guide

TEL 03-3941-8049

FAX 03-3941-8116

ホームページ : <http://jsca.guide>

(文責：一般社団法人日本スクールカウンセリング推進協議会理事 学校カウンセラー・ガイダンスカウンセラー 加勇田修士)

コーディネーターと定義した。名称を「教育相談」に限定しないことによって、結果的に特別支援教育課や高等学校課等との連携による、教育行政を横断した研修が可能になった。

養成研修を立ち上げるにあたって特に重視したのが、コーディネーター養成と支援委員会の定例化を軸にした校内支援体制づくりを並行して進めることである。なぜなら、担当者を養成しても、所属校の支援体制が不十分であれば、養成した担当者は所属校で孤軍奮闘することになるからだ。そこで、集合研修だけでなく、心の教育センターの指導主事が定期的に指定校を訪問し、コーディネーター・管理職とともに協議する、アウトリーチ型研修を軸にした。

生徒支援コーディネーターの役割を考えていく上で参考にしたのが、大野精一（1998）の役割モデルである。大野（1986）は、以前からコーディネーティングの重要性を提起しており、教育相談担当者をコーディネーターと考える視点を持っていた。また、大野（1997）は、学校における教育相談担当者の役割として、カウンセリングとプロモーティング（推進）の重要性を指摘してきた。私は、生徒支援コーディネーターを校内支援体制づくりの要と位置付けるとき、まず重要になるのが推進の役割と考えた。

そこで、校内支援体制づくりを推進していくためには、支援システムだけでなく、それを機能させる支援サイクルづくりが重要であると考えた。具体的には、年間を通して定例支援委員会をPDCAサイクルに位置付け、指導主事の定期的な訪問研修（年間10回前後）によって、支援サイクルが機能するようにした。その結果、支援委員会を定例化している県立高校は、2011年には13%に過ぎなかったが、5年後の2016年には61%になり、2020年には70%となっている。実際、私は、今年度からSCとして県立高校に勤務することになったが、外部性を持つSCの視点から見ても、支援委員会の定例化はほとんどの県立高校において日常的なものになっていると実感している。

一方、文部科学省（2017）の報告書において提起されている教育相談コーディネーターの役割はSC・SSWの活用に焦点を当てたものであり、長らく学校教育相談を実践してきた者としては限定的なものに感じられる。学校教育相談の実践は、より包括的で、創造的なものだ。しかし、今回の報告書を契機として、教育相談コーディネーターの役割につ

☆支部のキラリ！☆

「生徒支援コーディネーター」
養成研修の取り組みから見えてきたこと



高知県支部 今西一仁

高知県の県立高校には、「生徒支援コーディネーター」という校務分掌がある。

私は高知県心の教育センターの指導主事として、2011年から5年間、この生徒支援コーディネーター養成研修に取り組んだ。

教育相談コーディネーターという名称をあえて用いなかったのには理由がある。2011年の調査では県立高校の教育相談担当者の兼務率は90%を超えており、その64%が特別支援教育学校コーディネーターと兼務していることが明らかになったからだ。

そこで、学校の現状に即して、「教育相談担当者・特別支援教育コーディネーター等、校内支援委員会において連携調整役を担当する教職員」を生徒支援

いて検討にしていくことは、これからの学校教育相談の理論化・具体化において重要な機会になると思う。

特に、今後重要になってくるのが、学校の中の役割だけでなく、どのような権限が与えられていくかという点である。その点、教育相談コーディネーター養成は、人材配置や権限付与の点からも、都道府県の教育センター等教育行政の取り組みが要になる。

私は2015年から2018年にかけて、学会等でシンポジウムを企画し、高知県だけでなく、神奈川県立総合教育センターや岩手県総合教育センター、千葉県子どもと親のサポートセンター等の研修担当者に参加していただき、これまでの研修や実践についての取り組みを共有し、検証する場を作ってきた。教育相談コーディネーターの実践的・理論的な枠組みをつくっていくためには、私たち研究的実践家が、それぞれの立場で行っている実践や研修の内容を共有し、検証していくことの積み重ねがこれからますます必要になってくると考えたからだ。

会報67号において、調査研究委員会より、「コーディネーターの業務と学校の体制づくり」に取り組むとの報告があった。学校教育相談のこれまでの取り組みを踏まえて、教育相談コーディネーターの役割や権限をどう考えていくか、そして、どのような養成研修プログラムを構築していくかといった点について検討していくことは、これからの学校教育相談の方向性に大きく影響してくる。今こそ、全国の研究的実践家・行政担当者の、教育相談コーディネーター養成についての取り組みの共有と検証が必要だ。

(担当：小川 正人)



【宮城県支部】一支部活動報告

コロナ感染症予防対策の観点から、令和3年度も総会及び研修会の対面開催を諦め、軒並みオンライン開催となりました。しかし、万全の感染防止対策を行なった上で、第47回研修会・研究発表及び事例研修会を対面開催することができました。平時に比べ



れば少数の参加ではありましたが、28名の皆さんと直接お会いして、互いの息災を確認し、学びを共有できた時間は、久しぶりに楽しく充実した貴重な時間でした。コロナが収束したら、また会おうと約束し、それぞれの立場で子どもたちの健やかな成長のために尽力することを再確認する機会となりました。宮城県支部会員の「心の絆」は今も健在です。

コロナ以前の生活様式に戻ることはないとは理解してはいても、やはりお互いの「温かさ」を肌で感じる心地よさは、電波を通してでは味わえません。一日も早く心から大いに語り、大声で笑いあえる日が訪れることを心から乞わずにはられません。

以下令和3年度の本支部の活動を報告いたします。

1 総会・理事会

(1) 総会 ＊リモート開催

・期日 令和3年5月15日(土)

＊資料はHP上で提示

(2) 理事会

・第1回理事会 令和3年4月29日(木)

・臨時理事会 令和3年7月18日(日)

・臨時理事会 令和3年11月6日(土)

・第2回理事会 令和4年2月26日(土)

＊11月のみ対面開催

他はすべてリモート開催

2 支部研修会及び研究・事例発表会

① 第46回研修会 ＊リモート開催

・期日：令和3年8月21日(土)

・内容：「愛着にもとづく育ちの理解と支援」

・講師：小野 善郎 氏

(和歌山県精神保健福祉センター所長)

② 第47回研修会 *対面開催

- 期日：令和3年11月27日（土）
- 内容：「学校をコミュニティと考えて児童生徒を支援する」
- 講師：氏家 靖浩 氏
（仙台大学体育学部健康福祉学科教授）

③ 支部研究・事例発表会

- 期日：令和3年11月27日（土）
- 「コロナ禍における『つなぐ』学級経営」
曾根 奈緒先生（富ヶ丘小 教諭）
- 「発達課題を持つ児童の支援について」
佐藤 靖子先生（柳津小 養護教諭）
- 「学校・保護者・SCの連携による不登校解消の取り組み」
阿部 慶吾 SC（宮城県 SC）
（文責：宮城県支部理事長 渡辺 美貴）

★災害被災者支援委員会報告

本委員会が4名の委員で構成され、東日本を中心に支援活動を開始してから10年が経過しました。現地視察、現地の会員訪問などを経て、要請のあった学校への訪問型支援（校内研修・個別相談）、地域単位での研修という形で、現地の先生方へのエンパワーを通しての被災地支援を続けて参りました。

この経過については、「報告」の形にまとめて会員の皆様にもご覧いただけるよう鋭意努力を続けております。

リモート会議形式での支援委員会にもだいぶ慣れてきて、今は学会誌への掲載、学会のHPへの掲載、また栃木大会での実践発表などについても検討しているところです。

思い起すと、私ども4人は、それぞれ仕事をしながらの支援活動でしたから、やれたことは、限りのある時間・領域であったと思います。それも現地会員の方々のお力をお借りしての10年間でもありました。

ある大学で、支援活動の話をしたことがあります。終了後に一人の院生が声をかけてくれました。「被災地支援に訪れて、こうして語り継いでくださることが一番うれしいです。」実はその院生も被災地の出身だったことを後で知りました。

今期で、支援委員会は離れますが、現地会員の方々や院生の思いは共有し続けたいと思っています。

（文責：災害被災者支援委員長 砥柄 敬三）

★夏季ワークショップのご案内

新型コロナウイルス感染症の拡大が今なお続いているため、栃木県支部主管の「第34回研究大会（栃木大会）」がオンライン・オンデマンド方式で実施されます。それに伴い、第23回夏季ワークショップも昨年と同様にオンライン方式で実施することになりました。

実施内容は下記のとおりです。

記

- 1 期日 2022年8月6日（土）
午前の部（9:00～12:00）
午後の部（13:00～16:00）
- 2 実施方法 Zoomによるオンライン
- 3 募集定員 各コースとも80名
- 4 研修内容
(1)午前の部（9:00～12:00）
Aコース「学校の異文化理解から『声にならない声』を聴く」
講師：結城 恵先生（群馬大学）
Bコース「今、求められる学習指導 ～個に応じた学びの保障～」
講師：篠ヶ谷圭太先生（日本大学）
Cコース「コロナ禍を機に児童青年精神科医療現場や巡回相談から見てきたもの」
講師：新井慎一先生（尾山台すすくクリニック）
(2)午後の部（13:00～16:00）
Dコース「これからの不登校支援 ～コロナ禍、GIGAスクールを越えて～」
講師：伊藤亜矢子先生（聖学院大学）
Eコース「心を育てるグループワーク
一楽しむことから始めよう」
講師：正保春彦先生（茨城大学）
Fコース「研究デザイン及びリサーチクエスションの検討 ―論文作成の基礎的ルールと基本構成―」
講師：中村 豊先生（東京理科大学）
各コースの内容や受講料、申込方法等の詳細につきましては、第三次案内または学会ホームページでご紹介いたします。
皆様のご参加をお待ちしています。よろしくお願いたします。
（文責：研修委員長 向江 幸洋）

★会長コーナー

みなさんお変わりないでしょうか。この間、各委員会において、様々な取り組みが進展していることに対し、感謝申し上げます。



さて、例年の新学期とは異なる点が、今年は二つも重なって起きています。そのことが、子どもたちや私たち大人にも大きな影響を及ぼしているのではないのでしょうか。

一つには、なかなか先の見えないコロナ感染拡大の問題があります。この間、いくつかの自治体で、いじめ問題などに関わり、学校訪問をさせていただく機会がありました。先生方からは、「すぐにあきらめてしまう子どもが増えた」「マスク生活のなかで、子どもの言葉と感情がなかなか出てこない」「不登校の子どもや自傷行為をする子どもが増えている」といった話をよく聴きました。

二つには、毎日リアルタイムで映し出されるウクライナへのロシア侵攻の問題があります。平和な日常生活が突然の砲撃によって破壊され、多くの命が奪われるという理不尽な戦争は、日本、世界の子どもの目には、どのように映っているのでしょうか。感性豊かな子どもたちや日常生活で傷ついている子どもたちの心が、さらに傷つくような事態を危惧しています。

加えて、オンライン会議等が日常化するなかで、効率化の促進に拍車がかかっていないのでしょうか。一見無駄に見えるようなこと、たわいもない会話や感情表現をお互いに大切にしていきましょう。

(文責：会長 春日井 敏之)



★事務局より

夏季総会・研究大会やワークショップに関する三次案内が出ています。多くの皆様の参加を期待しております。

会長副会長会や全国役員会は、オンラインで実施してきています。全国各地の皆さんとやりとりする際に、利便性が高いので、このやり方を継続していく予定です。

- 67号でもお伝えしましたが、メーリングリストの作成を充実させていきます。まだメールアドレスの登録がすんでいない方は、各支部を通じて、事務局に報告して登録してください。
- 公益法人の申請については、継続認可待ちです。
- ガイダンスカウンセラー資格関連情報や研修会については、推進協議会のHPを参照してください。

(文責：事務局長 木村 正男)

★編集後記

会報68号をもって、災害被災者支援委員会からの報告が一旦終了となります。これまで10年間、何度も東日本大震災の被災地を訪れ、被災者支援に当たっていただきました。PTSDは10年、20年後にも現れることもあります。大切なことは被災直後だけでなく、長い支援が重要です。そのことをまさに実践していただいたのが本会災害被災者支援委員会であったと思います。改めて敬意を表すとともに感謝申し上げます。

(文責：広報委員長 山本 健治)

一般社団法人日本学校教育相談学会 会報
第68号

令和4年6月20日発行

発行 一般社団法人 日本学校教育相談学会
会長 春日井 敏之

編集 一般社団法人 日本学校教育相談学会
広報委員会 委員長 山本 健治

事務局 〒179-0073

東京都練馬区田柄3-11-28

一般社団法人 日本学校教育相談学会事務局

電話/FAX 03-3926-7386

HP <http://www.jascg.info/>